

Windows 11

で何が変わるのか

企業はどう対応すべきか

「最後のWindows」と言われたWindows10の登場から6年が経過し、この10月にWindows11がリリースされました。10との違いは何か、企業としてどのように対応すべきかを考えます。

ITライター
柳谷 智宣

Windows10が 最後6Windowsでは なかったのか？

2021年10月、Windows11（以下、「11」）がリリースされました。Windows10（以下、「10」）は2015年に登場したので、6年ぶりのバージョンアップです。

マイクロソフトは「10」が最後のバージョンになるとアナウンスしていました。そこからは、年に2回大きなバージョンアップが行なわれるものの、「10」が使い続けられていたのです。

なぜ今回、前言を撤回して「11」がお目見えしたのでしょうか。単に、名前を変えて売上をアップさせよう、という話ではありません。PCのセキュリティを高めるために、Windowsの機能だけでなく、ハードウェアの対応も必要になるからです。

「11」は「10」と比べると、システム要件が厳しくなっています。プロセッサは、2コア以上の64ビット対応が必要になります。メモリは2倍の4GB、グラフィックカードはDirectX12以上が必要です。さらに、システムファーム

ウェアはUEFI・セキュアブートが必須で、TPM2.0も必須になりました。

ハード的にかんりの高性能が必要というわけではないのですが、最後の2つは比較的新しい機能で、古いPCだと搭載していない可能性もあります。

UEFI・セキュアブートとはPCの起動時に、悪意のあるプログラムが読み込まれないようにするセキュリティ機能です。

TPMはTrusted Platform Moduleの略で、暗号機能を利用する際の鍵を生成・管理するチップです。「11」ではIDを保護する「Windows Hello」や、データを保護する「BitLocker」といった機能で利用されます。

「10」が稼働しているPCでも、アップグレード要件を満たしていないと、「このPCは現在、Windows11システム要件を満たしていません」と表示され、アップグレードできません。

「10」も登場して6年が経ち、PCのハードウェア性能や機能の差により、セキュリティレベルにも差が付くようになりました。

安心してWindowsを利用してもらうためには、どうにかして古

いPCを排除しなければなりません。とはいえ、いま動いている「10」はある日使えなくなるのも問題です。そんな理由から、「11」という新しいナンバリングを投入したと考えられます。

実は、「11」は、「10」から無料でアップグレードできます。「10」を終わらせて、また新製品を買ってもらおうというわけではありません。

実質的には、「10」はサービス

として進化し続けて行く、というマイクロソフトの宣言はぶれていないのです。

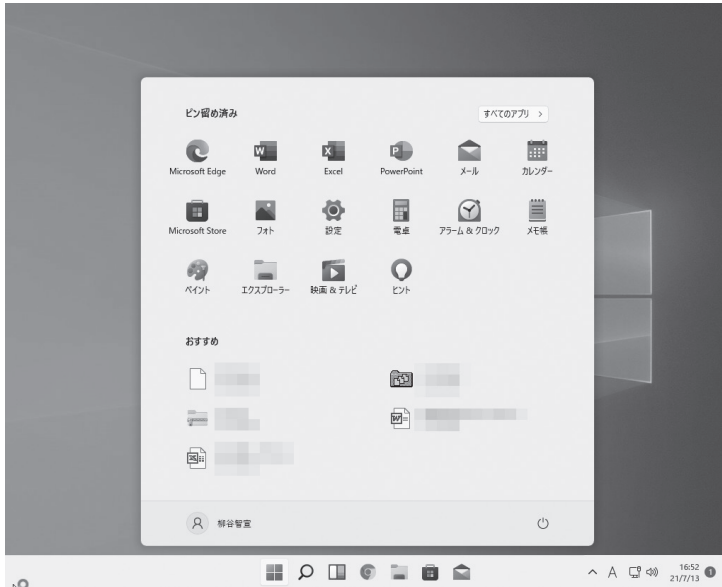
「11」の新機能と改良された機能、廃止された機能とは

「11」で変わったポイントや新機能について、まとめて紹介しましょう。

起動してすぐ目に付くのがスタートメニューです。昔からWindows

のスタートボタンは左下にあったのですが、「11」からは中央に配置されるようになります。スタートメニューも中央に表示されます。ちよつと驚きますが、ユーザーインターフェイス（以下、「UI」としての合理性は高く、すぐに慣れて快適に操作できます。

デザインは、全体的に丸みを帯びた優しいものになっています。ほんの少しの丸みですが、「10」の角張ったデザインとは印象が大きく異なります。



Windows11ではスタートメニューが画面中央に配置される



Windows11でAndroidアプリが実行できるようになる予定

「ドキュメント」や「ピクチャ」といったアイコンもポップなカラーになり、親しみやすくなりました。エクスプローラーや「設定」のUIも改善されたことで、直感的にいろいろな操作ができるようになっていきます。コミュニケーションツールは、「Microsoft Teams」が標準となりました。タスクバーにアイコンが配置され、個人アカウントで手軽に利用

できます。

コロナ禍でリモートワークが広がり、ビデオ会議が盛んに行なわれるようになりました。ビデオ会議サービスの「Zoom」が一気に存在感を増しましたが、マイクロソフトの「Teams」とグーグルの「Meet」も追隨しています。「11」に「Teams」を標準搭載することで、シェアを伸ばそうとしているのでしよう。

新機能の「ウィジェット」は、天気や株価、スポーツの試合結果などを表示してくれます。Microsoft Edge（エッジ）ブラウザのスタート画面のように、欲しい情報を一覧で把握できるのが特徴です。ウィジェットに表示する内容はカスタマイズでき、見たいカテゴリのニュースだけを配置するといったことも可能です。

「11」では、Androidアプリを実行できるようにすることも大きなトピックです。Amazonのアプリストアで公開されているAndroidアプリをインストールできるようになり、活用シーンが広がりそうです。しかし、この機能は迫って搭載されることで、実際には2022年中にずれ込むと思われるます。

「Microsoft Store」も大きくバージョンアップしました。見た目がブラッシュアップされただけでなく、中身も変わりました。これまでは、「UWP (Universal Windows Platform)」アプリを開いていたのですが、Win32アプリやウェブアプリなども公開できるようにしたのです。

iPhoneの「App Store」やAndroidの「Google Play」など、ほかのプラットフォームではアプリストアが重要な役割を果たしてエコシステムを構築しているのですが、「10」のMicrosoft Storeはばつとませんでした。

今回のバージョンアップで存在感が増したので、どう変化するのが楽しみです。

「11」で除かれた機能もたくさんあります。「数式入力パネル」やロックスクリーンに表示されていた「簡易ステータス」「ニュースと関心事項」「タブレットモード」も廃止されました。

ブラウザの「Internet Explorer (IE)」がなくなり、いよいよ「Edge」に一本化されます。古い自社開発の基幹システムを使い続けている場合など、どうしてもIEが必要な場合、「Edge」の「IE

モード」を利用できます。

「10」向けの「OneNote」や、これまで主なコミュニケーションツールとして使われてきた「Skype」も、「11」のクリーンインストールではインストールされません。3D関連機能もうまく普及せず、「3Dビューアー」や「ペイント3D」が外されました。

「10」で導入されたばかりの機能も、不評により廃止されたものがあります。目立つところでは、「コルタナ」がタスクバーから外されます。「タイムライン」もなくなりしました。

以前は、マイクロソフトアカウントでサインインすれば、壁紙も同期できました。

しかし、プライベートで使っている端末の壁紙がオフィスのPCに表示されると支障があります。そのため、壁紙の同期機能がなくなりしました。これは、機能削減というより、改善ポイントと言ってよいでしょう。

企業がチェックすべき「11」のポイント

多数の新機能が搭載され、快適に操作できるようになった部分も

あり、業務効率の向上が期待できます。しかし、「10」と比べるとわずかな差ですし、企業ユーザーから見ると別のポイントが気になると思います。

これまで、「10」の機能アップグレードは年に2回行なわれてきました。個人ユーザーとしては定期的に新機能が追加されるのは嬉しいところですが、企業としては半年ごとに機能が変わってしまうのは面倒です。その点「11」は、機能アップグレードは年1回になるので、対応の手間が減ります。

セキュリティに関しても、「10」と同等以上の保護機能が提供されます。厳しいハードウェア要件をクリアした分、強固なセキュリティ環境を期待できるでしょう。

アップグレードしても、現状のアカウントやファイル、各種アプリとそのデータは維持されます。とはいえ、実際にアップグレードする際は、バックアップを取っておくことをオススメします。

「11」はシステムの大きな変更があったわけではないのですが、それでも様々な不具合が報告されています。

たとえば、印刷するたびに管理者権限を要求したり、「Snipping

Tool」やタッチキーボードなど一部のアプリが起動しない現象が起きました。

仕事で使っているアプリも、「10」で動作しているなら「11」でも動作する可能性は高いのですが、メーカーが動作確認するまでは安心できません。

「11」にアップグレードできるかどうかを確認するなら、マイクロソフトのサイトから「PC正常性チェックアプリ」をダウンロードして実行しましょう。

この4～5年以内に購入したPCなのに、TPM2.0がないためにアップグレードできない、と表示された場合はUEFIの設定を確認してみましょう。チップは搭載されているのに、設定で無効になっていることがあります。

要件をクリアしているPCであれば、「設定」の「Windows Update」に「Windows11へのアップグレードの準備ができました」と表示されるので、「ダウンロードしてインストール」をクリックしましょう。

会社で「10」のボリュームライセンスを契約している場合は、VLS C (ボリュームライセンスサービセンサ) から「11」のI



「PC正常性チェックアプリ」でアップグレードできるか確認できる

SOイメージをダウンロードできます。
もし、「11」にアップグレードして問題が起きた場合は、10日以内であれば「10」にダウングレードできます。その期限を超える、「10」の再インストールが必要になるので注意しましょう。

アップグレードすべきか 見送るべきか

広告プラットフォーム企業の

AdDuplexが行なった調査によると、「11」がリリースされてから3週間後の10月末時点で約4・8%のPCにインストールされたそうです。その後、11月末時点では8・6%にまで上昇しており、今後はさらにペースアップすることが見込まれます。

しかし、企業ユーザーが「11」へ移行するペースはあまり速くないと考えられます。

そもそも、企業が現場で利用しているPCのうち、「11」を搭載

できるシステム要件をクリアしている割合はそれほど高くはないという調査結果が出ています。
IT資産管理ソリューションを手がけるJaiswepetが6万の企業や組織が利用している3000万台のWindows端末を調査したところ、「11」のシステム要件を満たしていたワ

クステーションは半数を切っていたそうです。

メモリの量は91%以上がクリアしていましたが、CPUをクリアしていたのは44・4%、TPM2・0を搭載していたのは52・5%でした。

サーバに至っては、TPM2・0を搭載していたのは1・49%に過ぎなかったそうです。

一般社団法人日本コンピュータシステム販売店協会（JCSA）が行なっている働き方改革やDXへの取組みに関する調査によると、「しばらく様子をみる」と「試行的に導入するが、展開は様子を見る」という回答が、中規模一般企業で53%、小規模一般企業で69%と最も多くなりました。
「既存パソコンを含め、早期に移行する」がそれぞれ12%、5%と低く、様子見が多そうです。

とはいえ、「新規導入パソコンにプレインストールされていれば使う」という回答が、それぞれ28%、21%となり、使うことに抵抗があるわけではないようです。

ちなみに、「10」はこのまま使い続けられます。いまのところ、サポート期限は2025年10月14日となっています。

2025年までであれば安全に「10」を使えるので、無理に「11」に移行する必要はありません。現在、「11」のシステム要件を満たしていない「10」搭載のPCも、さすがに3〜4年後にはスペック不足でお役御免となっているでしょう。買い替えたPCには、当然「11」が搭載されているはずです。

「11」は「10」から大きくブラッシュアップされて高機能で快適なOSに進化しており、個人的にはオススメです。筆者は個人用、ビジネス用ともにすべての端末を「11」にアップグレードし、問題なく活用しています。

しかし、企業ユースの場合は、焦って飛びつく必要はありません。Windows 8から「10」への無償アップグレードには期限がありました。が、「10」から「11」へのアップグレードはいまのところ期限はありません。現在、「10」環境で問題なく運用できているなら、当面はそのまま様子見するのはアリです。

ただし、アップグレードを失念してしまつてはいけません。2025年までは「11」の導入を計画し、スムーズに移行するようにしましょう。